

## IV 植生の評価と植生の保護・保全

調査域である千葉市内にはさまざまな植生が生育している。それらの植生の中で一定の相観を有し、植物群落として独立しうる最小面積を越える広さを占め、均一の立地条件下に生育していると判断できる植生毎に、路上のオオバコ群落からスダジイ林、タブノキ林などの自然植生まで、すでに述べられた手法で植生調査が行なわれた。同時に、上の条件を満足しないような不完全な植生であっても社寺林や屋敷林として一つのまとまりがあるものに対しては、各階層別に出現種のチェックを行なった。これらの資料は、潜在自然植生の判定に利用された。またこれからの新しい環境保全および環境創造に対する千葉市に現存する植生の評価と植生の保護・保全への提言の基礎資料として示されている。

### 1. 守られてきた社寺林・屋敷林

千葉市に残存生育する自然植生、特に常緑広葉樹林を調べてみると、その多くが神社・寺院・墓地と結びついていたり屋敷林として積極的に保護されてきたものである。潜在自然植生がイノデータブ群集やシラカシ群集ケヤキ亜群集であるところはケヤキ、ムクノキ、エノキといった落葉広葉樹が優占するところもあるが、多くは常緑広葉樹林または常緑広葉樹にスギの混生した林



Phot. 14 生実池脇の重俊院のイノデータブ群集。

*Polysticho-Machiletum thunbergii*-Wald des Tempels Kyosyun-in, Oyumi-ike.

分を示しているのが社寺林であり、屋敷林である。千葉市内に生育する社寺林の主な林分として以下に示される。

#### 千葉市のおもな寺院林と神社林

- 長作町・水神宮（イノデータブ群集，ヤブコウジースダジイ群集）
- 長作町・長胤寺（ヤブコウジースダジイ群集）
- 武石町・三代王神社（ヤブコウジースダジイ群集）
- 横戸町・明泉寺（イノデータブ群集）
- 大宮町・栄福寺・泉福寺（ヤブコウジースダジイ群集）
- 大畷寺町・大畷寺（ヤブコウジースダジイ群集）
- 検見川町・八坂神社（イノデータブ群集，ヤブコウジースダジイ群集）
- 生実町・重俊院（イノデータブ群集）
- 貝塚町・大六天神（イノデータブ群集）
- 加曾利町・円藏寺（ヤブコウジースダジイ群集）
- 稲毛町・浅間神社（イノデータブ群集，ヤブコウジースダジイ群集）
- 大畷寺町・鷲宮神社（イノデータブ群集，ヤブコウジースダジイ群集）
- 坂月町・坂月神社（イノデータブ群集，ヤブコウジースダジイ群集）
- 畑町・子安神社（イノデータブ群集，ヤブコウジースダジイ群集）
- 貝塚町・西光院（ヤブコウジースダジイ群集）
- 平山町・三社神社（シラカン群集）
- 幕張町・宝幢寺（ヤブコウジースダジイ群集）
- 富岡町・金城寺（シラカン群集）
- 猪鼻台・県文化会館（ヤブコウジースダジイ群集）

また有吉や生実などの古い集落では、各屋敷内にシラカン、タブノキ、モチノキ、カナメモチなどの常緑広葉樹の高木林で囲んで先祖を祠っている例もみられる。

しかし、これらの社寺林・屋敷林でも赤井，大畷寺，有吉，六通に代表的な例をあげることができるような高木層，低木層，草本層の各層とも十分に繁茂した多層群落はきわめて限られている。多くの社寺林・屋敷林は、管理ということの下生え，下草を刈ったり，落葉の除去等を行なったり，林床が人の往来で荒されていたりしている。高さ15mにも達する高木層がスダジイ，タブノキ，シラカンで広く被われているにもかかわらず低木層および草本層の植物がきわめて貧弱となっている。

社寺林や屋敷林については、宗教的観点や防風林，防潮林としての機能などさまざまな観点からとらえることができると同時に健全な生活環境形成，環境保全という観点からとらえることもできる。原植生がそのまま残されているのでも，種組成・群落構造などが完全な形で意識的に復元したものでもない。しかし，スダジイ林，タブノキ林やシラカン林で代表される自然植生に近



Phot. 15 子安神社のクロマツスダジイ林。京葉道路によって一部がけずられている。  
*Pinus thunbergii-Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii*-Wald des Tempels Koyasu.

い林分は、古く人々が移り住むようになったときに広く生育していた植生であり、その後人口が増加し活発で広い範囲での生活を営むようになって、一方で伐採等の植生破壊があり、他方で植生が復元するという形で実質的には各地にほぼ均等に配分・生育してきた。その間に何代にも及ぶ世代交代をとめないながらも土地利用、集落・都市の発達と植物群落の質的变化はほとんどなかったといえよう。

したがって、自然植生の構成種・郷土種による屋敷林や社寺林が健全な生育をしていることは、

社寺林や屋敷林が果す受動的な物理・化学的機能とともに、それらの植生の健全な生育を促す生物的環境を保証していたと考えられる。逆にいえば、植生はさまざまな生物的環境が保証されることによって持続しうるものである。

環境保全の指標としても有効な自然植生はスギ、ヒノキ、アカマツの植栽による人工林とちがいで時間の経過とともにより壮大な林分として生長し、存続してきた持続群落といえる。また常緑広葉樹林が伐採されると2～4年でアズマネザサーススキ群集、10～15年でクヌギコナラ群集などの二次林が生育する。そして自然林が復元するにはさらに数10年を必要とする。しかし二次草原や二次林と比較して自然植生は安定性が高く、維持・管理費用が少なく、果し得る多様な環境保全機能・景観維持などで効果に質的差異を示す。

社寺林・屋敷林という形で表現される林分は、景観を構成する1つの単位性をもつもので、これからの環境保全・景観保全の一つの中核と考えられる。



Phot. 16 落井町の台地斜面では屋敷の裏山にヤブコウジースダジイ群集、モウソウチク林がみられる。モミノキの大木もみられる。

Hofwald des Ardisio-Castanopsietum sieboldii mit *Abies firma* am Hang (Ochii).

## 2. 斜面とその植生の評価

千葉市は、下総から上総の北部にわたって武蔵野台地に続く洪積台地が広がっている。台地をかこむように海岸から延びているのが沖積面である。洪積層からなる台地と沖積層からなる低地との接点に帯状に発達している斜面は、千葉市の地形的な特色であるとともに、人為的干渉に対



Phot. 17 稲毛駅を中心に小中台方面を望む。国道14号線に沿った斜面にはクロマツ林、ヤブコウジースダジイ群集、マサキートベラ群集などが多くみられる。

Eine Vogelschau von Inage Bahnhof nach Konakadai. Der Waldbestand im Vordergrund gehört zum Tempel Asama in Inage.

しては弱い立地である。

洪積台地の斜面の植生は、都町、東寺山や萩台町の周辺に例があるように常緑広葉樹林を意識的に残していたり、モウソウチク林やスギ植林など群落高のある植分がみられるのも少なくない。現存植生図には、洪積台地上が畑で沖積低地が水田となりその間にある台地斜面がシラカン群集、イノデータブ群集やヤブコウジースダジイ群集などの常緑広葉樹林、クスギーコナラ群集、スギ植林、モウソウチク林などの植生域となっているのが最も一般的である。

台地斜面に植生が多く残されてきた理由としては、急斜面のため平坦地と比較して土地の利用価値が低いという消極的理由以上に、何度か開発・土地利用が試みられたが軟弱な関東ローム層で被われていたり、砂礫層とローム層との接点であったりして裸地化することで崖崩れが続くなど不安定立地化するため保安林的性格で積極的に残してきたと言える。また植栽や補植をすることも行なわれてきている。台地斜面の植生として自然植生のみならず、薪炭林としてのクスギ、コナラ、クリ、イヌシデなどの二次林、クズなどつる植物で被われた落葉低木林、ススキやアズマネザサの二次草原もあり、これらの植生が果している効果も無視できない。

台地斜面に生育する植生は、社寺林、屋敷林など塊状にあるのと異なり線状または帯状である。線状または帯状の緑地帯は、それが斜面であればより効果的に、景観保全・環境保全緑地として有効である。したがって台地斜面とその植生は基本的には保護し、必要に応じて積極的な復元がのぞまれる。

### 3. 二次林の評価

自然植生の常緑広葉樹林伐採後15～20年目に生育するクリ、コナラ、クヌギ、イヌシデなどの落葉広葉樹林が二次林である。二次林の代表的なものとして長い間薪炭林として定期的に伐採することによって存続してきたクヌギコナラ群集を千葉市内であげることができる。最近10～15年間に千葉市を始め各地の二次林に2つの変化がみとめられる。

第1に、他の自然度の高い植物群落と同様に、二次林の生育面積の急速な減少があげられる。植生の側からみれば、裸地、オオバコ群落、メヒシバエノコログサ群落（埋立て地雑草群落）といった自然度の低い植生域の増加である。原因は、造成地・ゴルフ場建設・宅地化などによる都市化が急速にすすんでいることと用材としてのクヌギ、コナラ、クリの価値の減少があげられる。

第2には、かつては定期的枝打ちや下草刈りを行っていた林分も、薪炭林としての用材価値を失ったり、枝打ちや下草刈りを行なうだけの人手を欠くために、放置されている傾向がある。放置されている二次林は、クヌギ、コナラ、クリなど夏緑広葉樹が優占するが林床にはその立地の潜在自然植生に応じた自然植生構成種の多数生育していることである。

クリやコナラなどの二次林が今日まで果たしてきた役割については、今後さらに検討の必要もあろうが、群落高が10～14mにも達する2～3層群落を形成する夏緑広葉樹林であるため自然植生に準じる環境保全林として、また田園景観保全の主役として機能してきた。同時に、生育面積が広くある程度の人為的干渉と共存し、「雑木林」として人々の生活域と結びついてきた。

千葉市でも市街地およびその周辺に生育する森林植生はきわめて限られている。したがって現在まで市街地およびその周辺に生育する二次林は、市内の限られた緑地面積の中で重要な位置を占めている。特に最近放置されている二次林では林床に常緑植物も多く生育している。林床の植物が欠けるところは補植を行なうことによってより効果的緑地を形成することができる。

### 4. 本格的緑地を欠く市街地・埋立て地

市民の日常生活域に緑で代表される環境保全林・保全緑地が確保されていなければならないという前提条件にたつとき、人々が最も多く集中して生活している市街地における緑の環境保全の現状はあまりに貧弱である。また団地の例をあげるまでもなく現存するわずかな緑は単木的に植えられた外来樹種、マテバシイおよび林床をまったく欠くタブノキやスダジイの単木にとどまる。市の北西部で国道16号線の周辺においてはクロマツが年々枯死している。土木・建設技術の進歩

は比較的自然度の高い植生が残されてきた台地斜面までも高度な土地利用を可能にした。限られた緑が屋敷林・庭木など個人レベルで残されてきた古くからの市街化地域においても緑の後退は著しい。

同様に、川崎町や稲毛海岸などの臨海埋立て地は、かつて海底であったところが山土や海底砂によって埋立てられたものであるために植生が貧弱なことと同時に東京湾から吹く風や飛砂などによる環境問題を解決するため植生復元の必要性がとりあげられている。

本格的な緑地を欠く市街地・埋立て地にあっては、従来の守る形での自然保護だけでなく、積極的に緑の環境を創造し管理することによって健全な生活環境を保証することが要求される。